地獄八景・感想

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　s14778mm 松本倫明

導入

　悪いことをしたら、地獄に落とされ、いいことをしたら天国へ行ける。子供の頃、そのように教わって、地獄に行くまい、と思うものだ。子供の頃に絶対に行きたくないと思う地獄はどのように描かれてきたのか。落語『地獄八景』と比較してみたい。

きつい地獄という描写

　昔、祖母によくいわれた地獄には閻魔大王がいて、罪人の舌を抜いていく。その後、釜茹でにあったり、針の山を登らされたりする。酷く辛い世界であり、絶対に行きたくないと感じる。

　また地獄ではないが、古事記の中の死後の世界について、イザナミは国生み、神生みの途中で死んでしまう。死後の世界、つまり黄泉の国でイザナミは見るも無惨な姿になってしまう。

地獄八景の地獄

　『地獄八景』に描かれる地獄はかなりユーモラスだ。三途の川のばあさんがバーを開いたり、閻魔大王が選挙のための人気取りをしたり。現世でせっせと働いて、上司に叱られて、挙げ句の果て過労死してしまう、そんな生活をしているよりも三途の川周辺をぶらついている方が楽しいのではないか、と思ってしまう。

死生観について

　古事記が記された頃、死はどのようなものだったのだろうか。黄泉の国の描写から読み取れるのは、穢く暗く怖い場所である。或は、仏教の地獄の様子を描いた、各六道絵などを見ると、鬼や獄卒に虐げられる人々を見て、恐れを抱く。しかし自分もいずれ黄泉の国に行かねばならない、或は地獄には行きたくないと思い、死を恐ろしいと感じることで、人は宗教や神に頼るようになったのではないだろうか。

　しかし1800年代にできた『地獄八景』からは、死に対する恐怖は読み取れない。江戸中期から各作品の中で地獄が江戸の町に見立てられ、ユーモラスに描かれるようになったことを長島弘明が指摘しているように、今回の落語も地獄を江戸と重ねあわせているのかもしれない。つまり死後の世界である地獄が現世に見立てられている。ここには死後に生まれ変わって次の生活があるという輪廻観や浮世感が反映されているのではないだろうか。

　しかしそれでも『地獄八景』に描かれる死後の世界は現世よりも楽しそうである。

参考

長島弘明　日本における「地獄」のイメージの流布　—『往生要集』の影響—